

大学の世界展開力強化プログラム 参加報告書

「ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成」

神戸大学大学院保健学研究科 博士課程前期 2年 押谷 晴美

1. はじめに

今回、神戸大学の世界展開力強化プログラムを利用して2ヶ月間、ガジヤマダ大学に滞在することができた。今回の渡航は2回目であり、インドネシアの保健事情、看護教育についてさらに理解を深めることができたのでここに報告する。

また、今回はイスラム教のラマダン（断食）を経験することができたので、この経験についても皆さんに報告したい。

2. 活動概要

活動期間：2015/06/02~2015/07/27

受入れ大学：ガジヤマダ大学（Gadjah Mada University）

責任者：Elsi Dwi Hapsari,S.Kp.,MS.,DS Totok Harjianto,S.Kep.,Ns.,M.Kes.

活動内容：タイ、スウェーデン留学生との交流

サルジト病院見学実習

インドネシアにおける看護師国家試験

ラマダン（断食）

3. 活動内容報告

1) タイ、スウェーデン留学生との交流

私が派遣されていた期間、同じくタイとスウェーデンからも留学生が来ていた。彼らの活動に参加させていただいたのでここに報告する。

<タイ留学生との活動：インドネシアの Health profile についての講義>

Ms.Elsi よりインドネシアの Health profile について講義していただいた。

WHO からのレポート (<http://www.who.int/gho/countries/idn.pdf?ua=1>) を基に現在のインドネシアの平均寿命、乳幼児死亡率、妊産婦死亡率、その原因を学んだ。インドネシアの保健医療の現状については前回の渡航時に学ぶ機会があった。より平等にすべての人々が医療を受けられるように医療保険制度の改正あり、また看護教育に関しても修士・博士課程が起動に乗り始め年々改善されてきていることを知っている。しかしながら、乳幼児死亡率は 29 人/出生 1000 対と日本の 3 人/出生 1000 対とくらべるとリスクが高い。また妊産婦死亡率も 190 人/出生 10 万対と高い。Ms.Elsi はこの数字が、彼女が日本で学ぶ事を決めきっかけとなったと語ってくれた。なぜインドネシアの妊婦は死亡するリスクが高いのか、なぜ日本では妊産婦死亡が低いのか、システムの違いか医療の違いかそれを確かめたいと思い彼女は日本に渡った。彼女は、自国の現状をよく理解することで問題視することができると教えてくれた。タイの学生からインドネシアの避妊方法についての質問があっ

大学の世界展開力強化プログラム 参加報告書

「ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成」

神戸大学大学院保健学研究科 博士課程前期 2年 押谷 晴美

た。Ms.Elsi はメラピ火山の噴火後の事例を基に話してくれた。インドネシアの避妊手段は、ピル、ホルモン注射、子宮内避妊具 (IUD)、インプラントなど女性側が主体となる方法が主流とされている。男性側の避妊手段であるコンドーム利用率は 10%と低い。メラピ火山噴火にともない、周辺の医療機関が利用できなくなり、多くの女性が避妊具を入手することができなかった。当時、海外から支援に来ていた団体がコンドームを配布したが、先に述べたようにインドネシアのコンドーム利用率は 10%と低いため、避妊のためにコンドームを使用するという習慣がなく望まない妊娠をする女性が多かったという結果がでている。

性感染症予防のためにはコンドームの使用が必要であるが、その国の避妊の手段として利用されていない場合、普及することは難しくそれが性感染症コントロールの障害になっていることもある。実際に、インドネシアの HIV 罹患者は年々増加しており、主に主婦の感染率が上がっている。Ms.Elsi はインドネシアにおける性教育の難しさも話してくれた。このように、それぞれの国の文化、状況を把握することが医療者として人々の健康をよりよいものにしていくためには最低限必要な知識であることを痛感した。

<Sardjit Hospital (サルジト病院) における見学実習>



スウェーデン留学生 2 名

の方が、看護師へのインタビューをかねて病棟見学されるとのことで、同行させていただいた。日本から制服を持ってきていなかったため、急遽ガジャマダ大学の職員の方が、学生時代に使用されていた制服をお借りした。病院のスタッフの方には、ガジャマダ大学の学生に見える就非常に喜ばれた。

大学の世界展開力強化プログラム 参加報告書

「ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成」

神戸大学大学院保健学研究科 博士課程前期 2年 押谷 晴美

サルジト病院では午前中、呼吸器感染症隔離病棟を見学させていただいた。肺炎や結核疑い、その他空気感染の恐れのある患者が入院している病棟である。病棟に入るには、微粒子用マスク（N95 マスク）を使用しガウンを着用しなければならなかった。作業をするのには非常に暑く息苦しいが、看護師は患者の環境整備から始まり、丁寧に患者に声をかけて患者の状態把握に努めておられた。

途上国の病院をイメージすると今にも壊れそうなベッドや破れたシーツが浮かぶが、サルジト病院はインドネシアにおいてもトップクラスの病院ということもあり、患者誤認防止のための管理や薬品管理、ごみの分別まで非常によく管理されており感心した。シーツやベッドも綺麗であることにも驚いた。半日であったが、インドネシアの看護師の日常業務を見学することができとてもいい経験となった。

2) インドネシアにおける看護師国家試験

インドネシアでは 2013 年に看護師国家試験が導入された。この国家試験制度導入には 2 年の歳月が費やされている。当初は年 3 回実施する予定であったが、昨年、今年度も 2 回しか開催できていないという現状がある。この背景には、インドネシアが 1 万 3,466 もの大小の島で成り立っている国であるということが大きく影響している。ジャワ島やスマトラ島など比較的主要な大きい島で試験を行うことは人間的にも可能であるが、小さな島では人員確保が難しくなっている。

受験方法は大学生と専門学校生はで異なっている。大学生はコンピュータ上で、専門学生は紙ベースで試験を受ける。インドネシアは大学卒と専門学校卒では働いてからの役割も違うため、試験の内容も違うとのことであった。日本では、大学卒でも専門学校卒でも、受ける国家試験は同じである。インドネシアでは学校レベルで看護師教育の違いがあることがわかった。

合格率は国としての発表はなく、今のところ各大学がそれぞれの合格率を把握しているのみであった。私が在籍していたガジャマダ大学はこれまで合格率 100% である。現在の合格基準ラインは合格点 58~60% であるが、今後は 75% を目標にしている。日本のように国家試験の過去問題を入手することは出来ず、各学校はそれぞれの方法で学生をサポートしているようである。国家試験が導入されたことにより、今後さらにインドネシアの看護教育がより発展していくことを感じた。

残念ながら、国家試験の内容は機密であり、どのような問題が出されているのかを把握することはできなかったが、看護の倫理や文化、アセスメントから計画、実行、評価まで含まれているとのことであった。回答は選択制で事例問題なども含まれているとの事である。

現在日本には、多くのインドネシア人看護師が日本での就職を希望し来日している。彼女たちが日本で働くためには日本の国家試験に合格する必要がある、もとも

大学の世界展開力強化プログラム 参加報告書

「ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成」

神戸大学大学院保健学研究科 博士課程前期 2年 押谷 晴美

と国家試験という仕組みがなかった彼らにとっては大きなチャレンジであった。さらに、日本語で受験しなければならないという現状から外国人看護師の日本の国家試験合格率は7.3%（2015年度）と以前低いままである。しかしインドネシアにおいても看護師国家試験が導入されたことで、彼ら自身が自ら試験対策を講じることができるようになり、今後合格する看護師も増えればと願う。

3) ラマダン（断食）

インドネシアは世界最大のイスラム教徒人口を抱える国である。こちらに来て、イスラム教の文化を少しずつ学んでいる。他の宗教、文化を知るとはとても興味深く、また同時に日本の文化や宗教観についても考える機会となった。

イスラム教には行わなければならない5つの行いがある。まず一つ目が、「syahadat」：信仰告白である。私はアッラー（神）を信じ、ムスリムになりますと宣言する必要がある。二つ目に「sholat」：礼拝である。一日5回神に祈る。三つ目が「puasa」でこれが断食と呼ばれるものである。4つ目が「zakat」：喜捨と呼ばれるもので、困窮者を助けるための手段である。自分の財産の2.5%が喜捨されるといわれている。最後が「Haji」：巡礼である。これは体力的に問題がなくお金に余裕のある人のみが行うとなっており、そのほかの4つは「wajib」と呼ばれ、絶対にしなければならないことになっている。

ラマダンはビジュラ暦の第9月に行われるため、毎年少しずつ時期がずれる。今年は6月18日から始まりちょうど私の滞在期間と重なることとなった。



学校の入り口などには、ラマダンまでのカウントダウンの垂れ幕が下がっていた。礼拝の前の呼びかけの「アザーン」がいつもより大きく聞こえた気がした。町がそわそわしているのか、それとも初めてのラマダンを経験する私自身がそわそわしているのかわからないが、ラマダン前はなぜか気持ちが落ち着かなかった。

ラマダンの始まった6月18日に友人に連れられてガジャマダ大学のモスクに足を運んだ。ラマダン中はすべての行為に対していつも以上の功德が得られるといわれている。そのためモスクに来て礼拝をささげる人も多くいた。とても神秘的であった。

大学の世界展開力強化プログラム 参加報告書

「ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成」

神戸大学大学院保健学研究科 博士課程前期 2年 押谷 晴美



礼拝

大学のモスク

またラマダンの期間中、看護学部のスタッフが集まり断食明けの食事をするとの事で誘っていただいた。その日に合わせて私も断食に挑戦した。4時に起床し朝食を済ませ、17時半のお祈りの呼びかけが聞こえるまで飲食は一切禁止となる。不思議と断食をすると決めていたからか、空腹は感じず達成することができた。そして約12時間ぶりの食事を前にしたとき、すべてのことに感謝した。

今回の滞在中、イスラム教のことをより深く理解する機会に恵まれ、自分の宗教観について考えるきっかけともなった。私の中で、宗教がもはや宗教という概念ではなく文化や生活の一部になっていると思った。旅の安全を祈願し、仏壇に手を合わせ、先祖を敬う。その意味を理解していなくとも、文化や習慣として自分の体に染み付いているのである。イスラム教徒は違う。唯一の神アッラーを信じ、死後自分がよりアッラーの近くにいけるように日々祈りをささげ、コーランで学び、規律を守り、そして人を助け、神に忠実である。正直なところ、まだ私には「神を信じる」ということがどういうことなのかわからない。神を信じている人たちの価値観もまたとらえがたいものである。し

大学の世界展開力強化プログラム 参加報告書

「ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成」

神戸大学大学院保健学研究科 博士課程前期 2年 押谷 晴美

かしながら、いろんな価値を持つ人と生活し時間を共有することで、自分の価値観を見つめなおし、他者の価値観を理解しようとすることの大切さを学ぶことができた。

4) おわりに

今回の滞在では、大学での学びだけでなく生活を通してそして宗教を通して多くの学びを得ることができた。このような機会を再度与えてくださったガジヤマダ大学の皆様、神戸大学の皆様に改めて感謝の意を表したい。今回の学びは自分の人生の中の大きな糧となった。